



昭和53年(1978年)

8月号(No. 398)

社団法人 日本山岳会  
The Japanese  
Alpine Club

定価一部 150円

## 目次

- 上高地清水小屋の想い出  
—ウェストン氏に叱られた話—  
(大木 操) .....(1)  
44年ぶりのベテガリ岳  
(相川 修) .....(3)  
山岳図書を語る夕べ  
—横川文雄氏を囲んで— .....(4)  
図書紹介 .....(5)  
支部だより .....(6)  
お知らせ .....(6)  
ルーム基金応募者ご芳名(13).....(7)  
東西南北 .....(7)  
遙かなるベテガリ岳  
人生を3倍に生きる  
集会・山行報告 .....(8)  
会務報告・ルーム日誌 .....(9)  
カット/松本慎太郎・梅谷隆三

## ▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時〜20時  
水、金曜 13時〜20時

日曜・祭日は休み

## ▶図書室開設時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日  
13時〜20時

## 上高地清水屋の想い出

—ウェストン氏に叱られた話—

大木 操

大正二年当時の上高地にはここに掲げた清水屋だけが、登山仲間のため一つのささやかな憩いの温泉宿であった。私はその年日本山岳会に入会したばかりの新会員で、一高山岳会登山隊と共に、八月四日槍岳登頂に成功したその夜から八日まで二階の室に四泊滞在し、その間に焼岳、前穂高岳に登った想い出深い宿なのである。

最初この宿に着いた時女中さんが足濯ぎのため盥に注いでくれた温泉に、梓川の徒渉で冷え切った草鞋穿きの足を投げ入れた時の気持ちの良かったこと、二階の室へ行く時廊下の板敷が妙に軋む音を立てたり、室の間仕切が荒壁のまま天井板も張ってなかったこと、

下の温泉場の棟木には上高地温泉株式会社と書いてあり殺風景だったが、温泉そのものは清澄で快適であったこと、晩の食膳は暗いランプの下で、味噌汁に干岩魚の煮びたしという粗末なものであったが、当時一泊六十五銭とあればあまり文句も云えなかったこと、別に新しい岩魚の塩焼とビールを注文して丸山通一先生と共に山旅の疲れの憂き晴らしをしたこと等等、数え上げれば大昔の想い出の懐かしさが無性に込み上げてくるばかりである。

恰度この頃来日三度目のウェストン氏が、初めて上高地入りした夫人と共に槍岳を目指して滞在中であったが、偶々この一軒家の清水屋を舞台にして極めて興味深いエピソードが生れたのである。

その一は、最近の会報に「六十四年ぶりの名のりあい」の一文を寄せられた辻莊一氏の昔のエピソードである。六十四年前に暫く若返って頂いて当時中学生であった同氏ら三人組が、大正二年八月七日今日は明神池へ行くのだと朝五時から眼を覚まし、前日前穂高へ登った嬉しさも手伝って可成りはいやいでいたところ、障子の外から妙なアクセントで「あまり騒いでくれるな」とウェストン氏から叱られたという事実を、昭和九年の会報三七号で辻氏自ら発表されていることである。

その二は、「ウェストン夫妻が愈々明日は槍へ出発しようとしている前夜に、どこの温泉宿でもよくありそうなユーモラスな事件が持ち上がった。折しも一高旅行部(註・一高山岳会の誤り)の猛者連中が、リーダーの大木操に率いられて燕、常念、槍縦走を終えて偶々上高地温泉での最後の夜を、駄菓子、煎餅を肴に番茶のガブ飲みという解散コンパで賑やかにガヤガヤと氣勢を上げていた時であった。と障子の外の廊下に洩いパスの呼声と共に咳払いがあつて「奥さま、あしたヤマへ登ります。皆さんヤマを愛します。静かにして下さい」と登山者の主に泊る宿屋では至極尤もな申出であるので、純情な一高生一同は急にしゃんとしてしまった。元氣のあるのが帳場に降りて主は誰かと問いついてみたところ、あの有名な日本アルプスの開拓者の一人ウェストン氏その人で、明日嘉門次を案内に夫人共々槍岳登山ということを知らされた……」

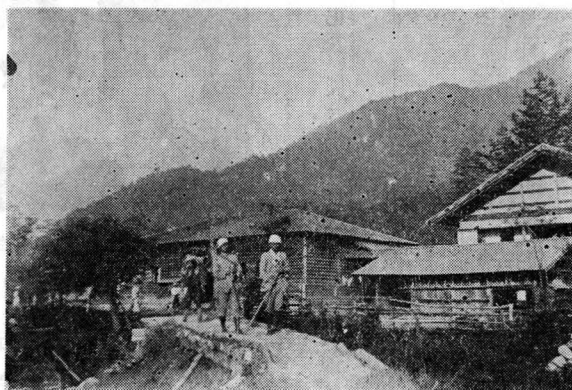
山をきれいに「三」は持ち帰ろう

昭和三十八年著書「アルプスの主嘉門次」中の一節であつて、恰かも現場に居合せたように詳しく面白く書かれている。しかも同書が根拠となつたと思われる記事が本会々員安川茂雄氏著書「日本アルプス山人伝」、「近代日本登山史」にも掲載されており、最早既成事実として普遍化しているようである。それにしても当時現場に居た私は当然生き証人であるべき管なのにどういふわけか明確な記憶が残っておらず、また当時の貴重な証拠となつたであろう私たちの山旅の時事新報連載記事も失われており、私は甚だ残念で堪らないので記憶を呼び戻すために、実は長野市在住の佐藤氏に電話して記事の由来を直接お尋ねしてみたところ、大正五年出版の信州の詩人窪田空穂氏の著書「日本アルプス」からという御返事であつた。

そこでその著書を精読してみた。窪田氏は義父と共に松本から徳本峠越えで大正二年八月九日上高地の清水屋に着いており、その後滞在中の消息について次のように書いている。

「……私たちの部屋は一番広いので自ら倶楽部になった。ここへ着いて落合った三人の画家高村光太郎君、茨木猪之吉君、真山孝治君

## 大正2年(1913年)の上高地



上高地清水屋全景／右から客室、浴場、帳場。人物は右から山口成一君、久能木慎治君、強力。左後方にかすむ山は焼岳(大正2年8月8日朝)。



河童橋上のウェストン氏夫妻と一高山岳会登山隊／右よりフランセス夫人、松本唯一君(手前)、高橋善一君、ウェストン氏、久能木慎治君(浴衣姿)、西村清介君、山口成一君(手前浴衣姿)、木内政蔵君(大正2年8月7日朝)

なども、夜になるとみしめしと廊下にさみしい音を立てて集ってき

た。雑談の種は豊かにあった。不思議に芸術上の話だけは出なかつた。

たが……私たちの話は弾んでいつか何処であるかも忘れる程に、高い調子と高い笑い声を交えたものとなった。そういう時であった。私たちは、廊下の外から人もしもし／＼という高い詠りのある声に驚かされて互いに顔を見合った。それは隣室にいるウェストンという外国宣教師の声で、夫人が病気をして寝ているが我々の話し声で眠ることが出来ない。遠慮してくれと要求するのであった。成る程荒い壁と重であるから話し声はよく通ることだろうと察した。……茨木君も高村君もウェストンには交際を持っていた。そしてウェストンのこの山に対する位置を聞くときと遠慮するのも当然だという気がした。……と、当時の叱られた模様を詳記しており興味を惹いた。これが叱られ話その三である。

こうしてみると、八月六日前穂高頂上で撮った写真の中の辻氏ら神戸二中の三人組、私ら一高山岳会登山隊、画家三人組の一人茨木氏は、揃いも揃ってこの清水屋の一室で日本アルプスの先覚者ウェストン氏から叱られたというわけでも何とも微苦笑を誘う興味深いエピソードを残したものである。なお佐藤氏の著書には私ら一高山岳会の叱られ話について「……解散コンパはそれまでと打ち切って一同寝てしまひ明日早朝に時刻をはかり、このウェストン一行を河童橋付近で待ちもうけてその警戒に接しようということに相談はまとまった。来た！来た！登山靴の上に草鞋を穿いた異形のウェストン、ニッカー姿のウェストン夫人……根本清蔵、上条嘉門次の順序でししとやってきた……」と、まことに詳しく記述されている。

私の記憶によればそうまで計画を立てたわけではなく、八月七日朝一足先に帰京する他の同志を見送りながら山口、久能木両君と共に清水屋の浴衣掛けの姿で河童橋附近まで来たところ、思いもかけずウェストン氏夫妻が嘉門次らを連れてやって来るのにパタリ出会ったというわけで、私は早速近寄って私達の山岳会のことなど話し記念撮影も同意を得たので、河童橋の上で私がシャッターを切ったのがここに掲げた写真なのである。

ウ氏夫妻や一高生の服装とか清水屋の棒稿の浴衣など今では貴重な風俗史といえるであろう。

次に叱られ画家組の一人高村光太郎氏が前穂の写真の中に居るのではないかの疑いが出て、私は昨秋近親者に写真判定を求めたところ違ふという答であり、高村氏が白骨を経て上高地入りしたのが八月八日であることも窪田氏の文献で判明したので、八月六日の前穂高登頂はあり得ないことで解決した。

当時三十歳の若き芸術家高村氏は、八日以後清水屋に腰を据えて上高地の風物を描きつづけていたが、九月に入ってこの地に愛人智恵子さんを迎えてからは益々興奮に燃え立ち、二人睦みく連れ立て大自然美の描写に熱中したというラブロマンスは既に著名である。その上、二人の仲をウェストン氏が妹か夫人かと問い質したという小説的物語まで伝えられていく。荒々しい山男ばかりしか出入りしなかった当時の清水屋にも、このような美しい華やかなエピソードが残っていることは、また一段とほほ笑ましい歴史ではなからうか。

めぐり来って恰かも第三十二回目のウェストン祭が行われる時に当り、生前に言葉交わしたウェストン氏夫妻を偲んで筆を執った次第である。

(昭和五十三年六月四日記)

## 四十四年ぶりのペテガリ岳

相川 修

旧の陸測五万分の一地図には標高と三角点符号が記されているだけでペテガリ岳の名は記載されていない。大正二年五月の測量時にその三角点名を辺天狩岳と称しているというが、昭和五年頃までにはこの山はあまり関心が持たれていなかった。また静内川(築退川)の中流は函の連続で通過困難であり、上流でのヤマベ釣りの旧土人達も三石町の飛舞から山越えしてコイカクシユシビチャリ川からペテガリ沢に達したという。

我々も昭和七年にコイカクシユシビチャリ川より一八三九メートル峰とヤオロマップ岳を目指した時にも同様山越えして入ったものである。次年昭和八年にペテガリ岳を試みた時は、遠い日高路を避けて十勝国側の中ノ川から入山したが果せず、さらに翌九年夏に同様札内川から支流のコイボクサツナイ川(現在はコイカクシユサツナイ川と称されている)からヤオロマップ岳、ルベツネ山と国境の山脈尾根上の倶利伽羅等の密生を踏み分け、押し分けてペテガリ岳を目指したものであった。またヤオロマップ川(歴舟川)または中ノ川からと北大山岳部から三

隊がペテガリ岳へ向ったのであるが、その年は札内川からの故中野征紀兄と小生の組が第一登、石橋恭一郎君等は中ノ川から第二登、そして豊田春満君等がヤオロマップ川から第三登とそれぞれその目的を果たしたのであった。しかし既に昭和七年夏に慶応の斎藤氏等によりあの密林を良く乗り越えて純粹登山としての初登頂を完成させていたのであった。

詳細は「山岳」第六十四月号「回想の日高山脈」、「スプリ」第八号(日本山岳会北海道支部会報)を参照せられたい。

このように遥かに遠い山頂であったペテガリ岳が静内ダム開発と林道開鑿とペテガリ山荘の建設、そして登山路の開伐によりにわか身近なものになった。その登山記が井手貴夫君によって「山」第三八九号に寄せられた。この時の登山会を踏まえて今回の日本山岳会北海道支部創立十周年(実際には再開設)記念事業として広く全国の会員諸氏に参加を募ったことは誠に時宜を得た企画であった。小生も四十四年ぶりのペテガリ岳との再会を望んでこの登山会に参加を御願したのである。参加

してみても驚いたことには、このように多数の会員が遠くは北九州からも来られ、また御年配の方々の多いことでもあった。それ程に日高山脈が如何に憧憬的であったか、またペテガリ岳が容易に登られるようになったかが思い知らされるのであった。

果して登山へのアプローチは短くなった。重い荷を背負って三、四日も費したペテガリ沢まで日高海岸の静内町から車で二時間を要しないのだ。海霧の影響を受けて麓に霞む新緑萌の牧場の中をひた走りに静内ダムへと向うのだが、これまで人々の通過を拒んできた函の深い岩壁は帯状の人造湖の底に沈んで湖岸は平凡となり、蘆荻の原始林に被われていた前山の斜面は伐開されて岩肌が露出し、それを挟んで造られた林道は羊腸と曲りくねって車を山奥へと導く。しかしこの荒々しい程の開鑿も後数十年も経ると自然の調整が行われ、植栽の木々も成長して創痕もいやされることであろうか。彼の四国の祖母谷の通路のように落ち付いた風景に帰せられることを願わずには居られない。他方ペテガリ岳へは容易に近付き得るのだが自然保護との兼ね合いは微妙にして困難なものと思う。そんな感慨を心に抱きつつ一行の車は小ちんまりとスマートに山合に建つペテガリ山荘の前に導かれるのであった。

小憩の後、御年配の足弱組の方は道邊組と称され、小生もその一員に加えられて寝袋を背負い、さらに高距六〇〇メートルのつづら坂を喘ぎ上り一〇五〇メートルコブ尾根上の路上が今宵の野営地となる。同勢十数名、夕餉の時の自己紹介で七十九歳の野口末延老、七十歳を越えられた佐藤テル女史の元気な姿が見られ驚き入るが、その他の七十歳以上の方々は健脚組にて山荘に残留されている由。天気予報は夕刻から明日にかけては余り芳しいものでなかった



し、雲はしきりに南東へと馳り去り、山鳴り、木擦れの音が気にならぬと言えは嘘になる。久瀧ぶりの野営に眠りは浅く、暫し仮睡む中に周囲が薄ら明るくなると間もなく健脚組がどやどやと登って来る。聞けば山小屋午前一時半出発とのこと。起き上って天幕の外に出て睡眼をこすっていると、見覚えのある顔が薄明の中に鉢巻姿でやって来る。望月副会長と十年ぶりの出会であった。二人の固い握手が交わされる。

前進して行ってしまう。我々は朝食のパックをほかに加温して貰って食事を済ませ、やおら腰を上げて出発したのは午前四時半頃であったか、幸いに天候は高曇りに煙霧が時折り山肌をかすめる程度でこの分なら午前中は持つであろうと歩を進める。次の一二五九メートルのコブにさしかかると右手にベッピリガイ山から神威岳、中ノ岳への稜線が見える。左手には一八三九メートル峰が昔懐かしい姿を屹立させている。ヤオロマップ岳は雲霧に閉ざされている。暫く尾根を上下して行くとはじめはペテガリ岳と間違えていたルベツネ山の上方の雲が美しく朝焼けしているのが眺められるのであった。

凹凸の小尾根筋の登行は遅々として進まない。久しぶりの登高に脚の筋肉がなじまないのだ。心臓は鼓動を増すのみで、呼吸は吐息のみで深呼吸に歩を止めねばならない。まよふ山は楽しみながら緩りと登るものだよと己にいい聞かせ旧知の山々をつくづく眺め、懐かしい山草のハクサンチドリ、コバイケイソウ、ウコンウツギ、山桜、オオサクラソウ、ゴゼンタチバナ、ツバメオモト、エゾヤマツツジと見とれながら休憩の時を費ぐのであった。

そうそう白花エンレイ草やサンカヨウも叢林の陰に見られた。黄



でまだ早春の花ばかりであった。

一九一〇メートル・コブの辺りからはようやくルベツネ山の右側にペテガリ岳の頂峯が真正面に見られるようになり、右方の神威岳も偉容を増し深い雪渓を数条収めている。その右肩に見えるのは春別山であろうか。南の国境山稜は陰になって見えない筈だ。僅かに左肩にのぞくのがソエマツ岳かも知れない。

ペテガリ岳の頂上に不図眼を移すと鞍部一二〇メートルより高距五五〇メートルの急尾根を直登して頂上に達した先発隊のシルエツトが浮んで見える。もう登り終えているのだった。後続も次々と刈り分けを攀っているのが見渡される。

それでは小生も少しは頑張らなくてはなるまいと急登にさしかかると、既に先発は跳ぶように帰途につき、ご苦労さんと声を掛ける間も惜しげに通過して行く。やれやれ遠々遠方から来たのだから折角の景観を充分に満喫して欲しかった。

頂上着午前九時四十分で殿りを引受けた訳だ。頂上では北風が稍強いが、薄曇で時々薄いガスが通過するだけで景観は申分ない。

一行の大部分は風当りの少ない所に寄り集って登頂の感激を満喫している。大塚支部長、佐藤テルさん、小生は支部長のお嬢さんの野立の衣服を頂戴し、幹事諸兄は

## 「山岳図書を語る

夕べ」

——横川文雄氏を囲んで——



四月十二日は午後七時から、ドイツ語圏諸国の本を数多く翻訳されている上智大学教授横川文雄氏をお招きし、お話をうかがった。まず山崎図書委員長を紹介があつて話は始められたが、ドイツ語の山の本に「くわしいわけではない」と訂正された後、氏が訳された夥しい本を中心に話が進められた。このことがとりも直さず、最近のドイツ語圏での山の本を語ることもなり、改めてその方面での氏の尽力に敬服させられた次第である。

氏が翻訳を手掛けられた頃の日本登山界では、山岳雑誌「ケルン」がその先端の情報を伝えており、ヘディンの「トランス・ヒマラヤ……」や、ナンガ・パルバットでの度重なるドイツ隊の悲劇、救助隊を目の前にして事切れた、アイガー北壁でのトニー・クルツの死等、当時の岳人、とりわけドイツ語圏に興味をもつ岳人の注目を引くような事件が次々と起っていた。この頃のドイツ語の本で邦訳されたものが、本会々員だった伊藤藤原氏の「ウム・デン・カンチ」(バウアー著)以外特に目立ったものがないとすると、横川氏がドイツ語の山の本を翻訳し、同好の士に読ませようと考えられたのは当然だったようにも思える。英語と違ってドイツ語は山好きの手に負えるとは言いがたい。英語を能くし、さらにドイツ語をマスター出来るような人材は、年とともに山から遠ざかるのが普通だし、ドイツ語を能くする人の多くはドイツ文学に目が向いてしまう。とすれば、山好きで山の本が読みたくて、たまたま語学の才に恵まれた氏が、今なお学生にスキーを教え、六十歳にならんとするに厳冬の甲斐駒黄蓮谷を攀じたとすれば、ドイツ文学会からは異端視され、大学教授としては変わった人だと見られるのは、氏が言われるように本当なのかもしれない。

郷土文学的作品「雪山の生活者」、『わが山々』を書き、ドイツ文学界でもその価値を認められている八十歳のトレンカーが、アイガー北壁で映画を撮るトニー・ザイラーに色々と説明するかくしゃくとした姿を見れば、象牙の塔に籠もるといった言葉は、氏にふさわ

しくないようにも思われる。レニー・リーフエンシュタールの若かりし日の美しい写真が載っている本を、この夜集った者は手にとつて見せて頂いたが、この本を自分で最初に訳し、「外語」の仲間に読ませた氏は、山登りする女性の中に、美しい人の存在を知ったようにもお見うけした。

一九五三年、ヘルリッヒコフファール隊によりナンガ・パルバットは登頂されたが、この時の報告書「ナンガパルバット一九五三」の翻訳権争奪は、ヘルリッヒコフファールがメルクルの義弟であったことや、ベヒトルドの「ナンガパルバットのドイツ人」などにより、そうなる下地がすでにできていたことにもよるのだろう。この時の勇者ヘルマン・プールの未亡人オイゲニエと氏の交際は、プールの「八千メートルの上と下」の翻訳がきっかけのことであった。それ以降、ドイツ語圏で発行されたものは、ディレンフルトの『第三の極地』以来数多いが、やはりそれ以前に発行されているクギーの「一登山家の生涯より」は、エーリッヒ・マイヤーの『行為と夢想』とか、レオ・マドゥーシュカカの『山の若者』とともに、山岳書の古典として変らない地位を保っているようであった。これらの本は多分に哲学的であつて、現在プールの継ぐ登山家と言われているラインホルト・メスナーも、国籍はイタリアだがドイツ、オーストリアのこういった流れを汲む一人と言えるそうである。最近彼が書いた『挑戦』とか『大岩壁』といった本も、外見は奇異を衝いている風に見えるが、思索的とのこと。一昨年メスナー来日の折、彼は三ツ峠でハーケンベタ打ちのグレンデを見たのだが、その時「あれでは登攀に流れが出ない」と言っていて、ただ登りさえすればよいというやり方に疑問を投げたところ、氏は話された。衰弱させられる都会、Jehisan Teban (ヘクティッシー・レーベン) からの脱出。これがメスナーの追究する命題であるらしい。

ヘルマ・シムケはヨーロッパで第六級の登攀をする女性クライマーだが、彼女の書いた「切り立ちし山」などは、ドイツ山岳会理事のティニンゲルベルガーや長いことドイツ山岳会監事をしてきたグラスラーによれば、良い山の本と言えるようだ。ヘルベルト・ティッヒの書いたヒマラヤ関係の本(チョ・オユーについては氏の訳本がある)も、ボナッティのドイツ語訳の本とともに読まれていること。ギド・ランマーの『青春の泉』、マルティン・シュユリスラーの『職業・冒険』、ラインホルト・メスナーの『冒険への出発』

佐々保雄さんと小生が担ぎ上げた  
罐ビールにて、小生等はコココー  
ラにて乾杯し登頂の喜びを頷ち合  
うのであった。

以前に來た時の頂上は三角点の  
石標と慶応の連中の名刺を入れた  
煙草の空罐とチョコレート銀紙の  
一片のみが人間の氣配を示す痕  
跡であつて後は原始のままであつ  
たが、今では頂上の高山植物の絨  
毯は減り尾根には踏跡が明瞭につ  
けられ、また頂上直下には岩石を  
動かして平にしたキャンプ場も見  
られるのであった。併しなお北側  
の小さな園谷は静かに昔のままに  
僅かの残雪を懷いての佇いを見せ  
ていた。遠く僅かに見えるカムイ  
エクウチカウシ山の頂と札内岳と  
それに連なる国境尾根の峯が雪を  
残し、半世紀近くを経過したとは  
思えぬ親しみ深い眺望を与えてく  
れた。

帰途は重い足を曳きずりながら  
コブの起伏の多い尾根道は地図で  
計った距離感より遙かに長いもの  
であつたが、好天の中に登頂でき  
た後として快い疲労感に包まれてい  
たと言ひ得よう。天候は次第に下  
り坂になり午後には山々の峯頭は  
次第に雲烟に閉ざれて行つた。

誠に恵まれたこの日の山行は終  
りを告げ一同は満足氣にペテガリ  
山荘より再びバスに乗り新冠のユ  
ートピア牧場に於て楽しい懇親の  
一夜を過したのであった。

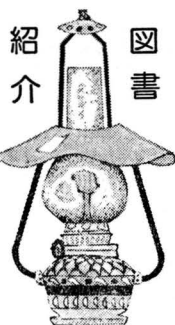
(一九七八・六・三〇)

「山々へ帰れ」は古典的な山登りをする人々にも好まれている本  
で、その他シュミットの「マッターホルン」、カール・ブローディッ  
ヒの「アルプスの四千メートル峰」、ハンス・エルテル「山のヴァガ  
ボンデ」、ハインリッヒ・ハーラー「白いくも」、それにカール・ル  
カン、ヘックマイヤー、ドイツ語圏のものではないが、マゾーの本  
などが掲げられた。

だが、現状は対外的に目立つものが少なく、国内向けのドロミ  
テンとかカイザーゲベルゲのような国内の山の案内書が多く、それ  
らの新しい傾向としては、下山だけのコースを採り上げたものと  
か、モン・ブランを楽しむコースといったような特殊な方法が打ち  
出されているらしい。ポナッティなどが南極のルポライターになつ  
たり、独特の山登りを展開するメスナーのように、山登りについて  
も新しい方向が暗中模索されているようで、衆目を集めるようなも  
のは今のところ見当らないようである。

このあと質問形式で話が進められたが、パウルクとか、ゲオルグ  
・ヴィンクラーなどの本は、書誌的に山岳書を研究している人の  
外、複製版が出回るといった様子もなく、一般の人々は日本の山岳  
愛好者が知っている程にもその名を知っていないようであった。ま

## 図書



## 紹介

### 山 かなる 静

川崎精雄・望月達夫・山田哲郎  
中西 章・横山厚夫 共著

川崎精雄、望月達夫、山田哲郎、  
中西章、横山厚夫ら五氏の共同執  
筆になる標記の著作を一読して、

よくもまあこのように人々の氣が  
つかない山を探しだし、入念にの  
ぼりつづけたものだ一驚した。  
静かなる山は当然に珍しい山であ  
る。著者らは、五万分図幅の隅っ  
こで次に続く図幅との境いめあた  
りにある、地図上で発見するのに  
も骨の折れるような山まで、見落  
すことなく、その山独特の持ち味  
とよさとを達者な筆によって紹介  
している。

このようなキメの細かい山のぼ  
りがやれなくて、あまり人の行き  
そうもない日を選んで山行をす  
る、そして、山では誰にも会わな  
かった、などと言って悦に入って  
いる横着なぼくなどとは、どだい

た質問の中から、西ドイツのスポーツ用品店シュスターで発売され  
たアノラックの話が出た。雨水を通さず、内側のコンデンス・ウォ  
ーターを外へ滲み出すといった画期的生地が考案されたそうで、こ  
の件についてはすでに承知されている出席者がおられたが、やがて天  
幕にフライが不要となり、わざわざ雨具を用意することもなくなる  
であろうとのことだった。このことから装備に関する書物にも注目  
すべきものがあることが示唆された。ドイツ語圏では遭難救助に関  
する研究が盛んで、その方面での書物もいくつかあるようだった。  
話の中でミュンヘンの篤志家リックマースが、私財を献じてド  
イツ山岳会図書館を設立したこと。第二次大戦で全焼したのだが、  
それにもめげず、同じ地に同一人物により、ドイツ山岳会図書館が  
再建されたことを話された。当会の図書館を充実させようと努力さ  
れた、また努力される多くの会員諸氏を思うが、日本で最も多くの  
山岳図書を蔵している当会の図書室が、日本の山岳図書館にまで成  
長して欲しいと思うのは横川氏一人だけではないように思う。

残念ながらまだ当会々員ではないのだが、横川氏はこの機会に、  
氏の所蔵されている図書を逐次、当会図書館に寄贈することを申し  
出られたので、ここに申し添えます。  
(岡沢祐吉)

心がけが違ふようだ。

珍しい名の山といえ、オドケ  
山は、望月氏の旧著「遠い山近い  
山」で知っていたから、それほど  
驚かなかつたが、天狗角力取山  
(一三六〇メートル)などは、博  
士山(はかせやま)と共に、奇名、  
珍名と言つてよさそうだし、蕎麦  
粒山(一四七三メートル)という  
山名は見ただけで、純情可憐な山  
が連想される。また土埋山(つち  
うずみやま)と聞けば、字づらか  
らしてそこはかとない哀愁を感じ  
させ、いずれもぼくが始めて知っ  
た名の山である。天狗角力取山は  
東北朝日や那須にも同名の山があ  
るけれども主として山頂の形状に

よるものらしい。本書には猪苗代  
湖周辺のものがとりあげられてい  
る。

「あらたかな山登りの薬効も三週  
あいだをあげると、腰のまわりが  
鈍重になり、寝付きが悪く、仕事  
も根が統かない、これすべて山登  
り中毒の禁断症状の表われ」だと  
述べているが、それは、この筆者  
ひとりではなく、五人の筆者に共通  
して言えることであろう。

本書を読むと著者らは毎月二、  
三回はこうした山旅を楽しんでい  
るらしいことがわかる。そのよう  
な豊かな山歩きに対する共通の姿  
勢からか、読んでいて五人のうち  
の誰の手になるものかわからなく

なるほど、著者がこの本を中心にして浴けあっている。

ある山を読みながら、この筆者は誰だろうかと考えてみる。たぶんK氏ではないかと思つて巻頭に分担割で確めると、それは意外にM氏であつたりY氏であつたりする。五人の意気が合つていゝのか、混然一体としていて、いささかの違和感もみいだせなかつた。一章読むごとに、ついでに筆者の同定を試みたりするの興であると言つても非礼にはなるまい。

静かなる山、九十七座、あえて百座としなかつた著者らの見識も買いたい。また比較的東京に近い周辺の山九十七座が選ばれているだけに、読者には、明日からでも一つずつやってみたい意慾を起させることだろう。

不老山という山があつた。ぼくはつきり自分のぼつたこととある駿河の不老山かと思うと、ここにあるのは中央線上野原を基点とする不老山だつたりする。南月山とあるから、これも東北の月山の続きかと、それならばよくも登つたと早とちりをした。眼をとおすと那須連峰の一山なのである。よくこういう山をみつづけるものだと感心した。

「完膚なきまでに開発された日本の山には、昔日のような静かなる山はなくなつた。しかし僅かではあるがまだ残されている山があ

る」と望月氏がまえがきで述べているが、本書が多くの読者をあつめ、洛陽の紙価を高めれば高めるほど、ここに紹介された静かなる山々が姿を消して行くことになるのではないかとこのことをおそれる。

### 熊本支部春季支部会 総会報告

熊本支部では去る六月三日(土)午後五時半から熊本県阿蘇郡阿蘇町二重峠の麓にある外輪山荘に十三名の会員が集り、春季総会を開いた。総会では三谷支部長より一身上の理由で支部長辞任の申出があつたので役員改選を行い、次のとおり新役員を選出した。

支部長 西沢健一(新任)  
常務委員 本田誠也(新任)  
委員 玉名金助、首藤宗利、馬場猛、佐藤光俊(いずれも留任)

会計監事 本田誠也(兼任)  
事務所は従前どおり〒882熊本市国府一丁目一番五号西沢健一(電話)〇九六三六四〇(五五五)。

なお、現在の支部費年額五〇〇円を一〇〇〇円に改訂した。

題する写真に劣らない水彩画が一枚巻頭を飾っているが、装釘も受けもったといわれるこの作者の藤井美氏についての紹介がまったくされていないのは、絵にも関心をよせる読者も少なくないだけに惜しいと思う。

(織内信彦)  
昭和五十三年七月 茗溪堂刊  
変型判二〇五頁 写真十六葉  
定価一七〇〇円

### 支 部 だ よ り

八四)に登山、早朝からあいにく小雨であつた。この雨は五月中旬から西日本一帯につづいた晴天つづきの中に恵みの雨として待望されていたが、雨量はほんのおしめり程度であつた。午前九時山荘を出発し、外輪山に着く頃には止んでいた。しかし、広大な阿蘇外輪山上(端辺高原)一帯は厚いガスに包まれ、鞍岳頂上に着いて降りるまでこのガスは晴れなかつた。山麓の阿蘇牧場まで車を使ったので早く降りて来られ、帰途は菊池水源へ回り、当地で解散した。

### 北海道支部十周年 記念の集い

六月十八日、札幌市南区澄川四条三丁目米永会館「札幌山の会」クラブルームで日本山岳会望月達夫副会長、大塚武北海道支部長等ペテガリ岳山行参加者を混え盛大に祝賀会を行った。出席者四十三

名。

(参加者氏名) 大塚武、望月達夫、秦巖夫、高沢光雄、平野明、井手貢夫、相川修、山川力、浅原健蔵、石崎貞子、兼平治水、一原有徳、杉野目浩、松沢節夫、近藤信行、高橋憲二、横山厚夫、横山康子、岩崎三郎、末岡睦、長沢光和、鼎

### ●お知らせ

### 福島支部創立三十周年 記念集会

日時 10月8、9、10日  
場所 福島県東吾妻山  
申込 福島支部八巻和男宛  
詳細は「山」七月号参照

### 自然保護上高地集會

日時 9月9日  
場所 上高地山研  
申込 山岳会事務局まで  
詳細は「山」七月号参照

### 山の歌教室

日時 9月19日18時30分より  
場所 日本山岳会ルーム  
詳細は「山」七月号参照

### JACノミの市

日時 10月28日14時〜17時  
場所 日本山岳会ルーム  
出品締切 10月10日  
詳細は「山」七月号参照

治紀、井関扶、井関ヒロ子、森川洋佑、淡川舜平、片山全平、佐藤正雄、福田光子、浅利欣吉、坂本直行、萩谷三枝子、柳田涼子、松家晋、野口末延、佐々保雄、新妻徹、亀井秀子、斎藤桂、高遠宏、中垣淑子、北島光子、岸 栄

### 第11回図書交換会

恒例の山岳図書交換会の日程が左記の通り決まりました。

日時 10月21日(土) 午後2時  
(3時より抽籤)

場所 日本山岳会ルーム  
毎回多くの会員からご協力をいただいておりますが、どうぞ本年もお手持ちの書籍・雑誌等のうちご処分予定のもの、または会のために役立たせていただける本がございましたら、一冊でも結構ですからぜひご出品下さい。

ご出品いただけます方は、締切日の10月5日(水)までに「出品書籍名・(希望価格)・会員番号・住所・氏名」をお書きそえの上、図書委員会までご連絡下さい。多少纏まった場合は近郊に限りお伺い致します。(地方の方につきましてもルームではいつでも受け付け致しますので、おついでに折にご持参、またはご送付いただければ幸甚と存じます) (図書委員会)

## 第21回紅葉会御案内

今回は古くから火防の神として信仰され、皆に親しまれている遠州の秋葉山で開催いたします。

期日 11月11日(土)・12日

場所 静岡県周知郡春野町 秋葉山秋葉寺(三尺坊)

募集人員 60名、貸切バスのため満員になり次第締切。

参加費 六五〇〇円(浜松駅南口よりの交通費、懇親会費、宿泊費、翌日昼の弁当まで)

集合 11月11日午前11時国鉄浜松駅南口、出発11時30分

バス終点坂下から三尺坊まで正味一時間半歩きますので軽山行出来る服装、雨具をお忘れなく。

(高年齢者で足の弱い方は別に考慮します)寝具はありますが、セーター程度はご用意下さい。

当日部屋割後、入浴、懇親会。翌日は朝食後現地解散。

コース

A班 東海自然歩道を秋葉ダムに下る。

B班 秋葉街道を歩く。

参加希望の方は10月25日までに住所、氏名、電話番号、年齢、性別、会員番号、希望するコースの班を記入の上、予約金三〇〇〇円をそえて静岡県支部宛お申込みください。詳細は参加者に通知いたします。

(静岡支部 水野公男)

## ドイツ山岳会(DAV) 青年部来日

昨年の日本山岳会代表の訪独に応えて、ドイツ山岳会青年部代表五名(リーダー、リョーディガー・ピアル氏)が八月十二日に来日し、三週間の予定で各地を廻る。青年懇談会がその世話にあたり、ホームステイの提供や山行を共にする。日程は、八月十六日より十七日まで日光の学習院大の光徳小屋に滞在、八月二十一日より大町、扇沢、針の木、五色ヶ原を経由して、八月二十四日に立山の文部省登山研修所に到着。以後同研修所をベースとして三十日まで附近の山々を登る。八月三十一日帰京。九月二日、お別れパーティー、九月三日離日の予定。山行、パーティーの参加を歓迎します。連絡は青年懇談会。

## ルーム基金応募者

### ご芳名(13)

(昭和53年7月10日現在)

敬称略・順不同

【東京の部】なし

累計 六〇〇名、一一五・九口

金二一、五二九、〇〇〇円

【既報分に一口一名重複あり、訂正】

【地方の部】一口五千元、数字は口数

(2) 三谷孝一、石上隆章(1) 下



東西南北

## 遙かなるペテガリ岳

北海道支部創立十周年

記念登山——

勇気づけられ、岳樺の新緑につつまれた長い尾根の登降をくりかえし、最後の五〇〇メートル余を登りきって山頂にたつたとき、そこからの展望に心から満足しなかつた者はなかつたであらう。

やや高曇の天候ではあったが、北に遠くカムイエクウチカウシから延々とつらなる日高山脈、すぐ北にはヤオロマップとその西に聳立する一八三九m峰に目を奪われ、また南には中ノ岳の彼方に神威岳、ソエマツ岳などがはつきり眺められた。下りでは、時間の経過とともに陽光もさしてきて、ブヨの猛攻に苦しめられたが、頂上付近のキバナシヤクナゲ、西尾根の所々ではウコンウツギ、ツバメオモト、シラネアオイの花に慰められ、ウグイスやツツドリの声も絶えなかつた。

私の足では往復十一時間半ぐらいかかったが、今回は野口未延さんの七十九歳を筆頭に、佐藤テル、佐々保雄、牧野衛、川上精雄、田口謹之介氏らいづれも七十歳以上で、六十歳以上も数名はいた筈だから、平均年齢はかなり高かつたかと思う。それだけに準備にあ

られた支部実行委員の方たちのご苦労も、ひとかたならぬものがあつたことと、心からお礼を申し上げたい。支部委員の行き届いたご配慮と、天候にも恵まれたため、まことに申し分のない記念登山であつた。参加されたすべての方々が満足されたことであらう。



ル

った片山純吉さんの弟の全平さんが登つたことである。私個人としては、大塚武支部長とは同じ山岳部であり、彼の方が少し若い、四十余年ぶりに一緒に登れたことが、やはり嬉しかった。

十七日の宿舎となつたユートピアロッジは、広大な牧場のなかにある、いかにも北海道らしい施設で、会員懇親の場としても最適であつた。行事に参加した最長老会員平沢亀一郎さんの音頭で杯をあげ、牛肉の料理を飽食した一行の歓談がおそくまで尽きなかつた。

(望月達夫)





東西南北

その2

## 人生を三倍に生きる

西堀会長を囲んで

婦人懇談会

(I)

五月二十四日(水)夜、西堀会長をお迎えして婦人懇談会がもたれました。

たまたま日大北極探検隊のレセプションとかさなったため、定刻六時半よりはかなりおくれで始まりましたが、日大隊、植村さんと快挙の続いたあとで、会長のお話はずんずんと時のたつのを忘れるほどでした。

北極の話、植村さんの人柄をたてる逸話から「人間、一生をいかに有効に使うか」の話になり、会長の持論でもある「人生を三倍に使う法」として、無駄なことはしない、同時に二つすること、そうした中で友情のためにいかに時間をさくかという、いわば人生哲学が紹介されました。

「人間は経験をつむために生まれて来た」といい、「どうせやらねばならない仕事なら楽しんでやることだ」といわれる会長は、七十代の今も老いを感じさせない活力で、八時半テレビ局さし廻しの自動車で、深夜の録画どりにかけつけて行かれました。

会長が帰られたあと、婦人連の話題は「人生三倍に生きる忙しい人を、蔭で支える奥様はどんなだろうか」ということに発展し、女の愚痴や鬱憤が吹き出して大にぎわいになりました。女性の立場も世代によってかなりの違いがあつて、明治生まれの婦人登山家たちはパイオニアとしての苦勞のほかに、家庭人として筆舌につくしがたい忍従があつたということでした。それを恨みつらみでなく回顧する先輩、笑いながら聞いている昭和二けた、和氣あいあいの二次会となりました。

「こんな楽しい会は初めて」という好評にこたえて、七月二十五日(火)再度、会長をお招きしてお話を聞くことになりました。

出席者二十六名。(近藤 緑)

(II)

前回は三人前動く話をしたが今回は早とちりで十やるうちその二分の一から三分の一は失敗するが他がよければそれでいい、とユーモラスな話から始まる。

山登りはダンシング・クライミングがよく、その人のペースとリズムで行動するのが安全である。リズムカルなのが面白い。たのしくていい。しかしね、本当の山登る人はダンスは、ようやらん。原子力問題を納得させるにはユーモアをもって話さなければならぬ。

日本山岳会の今後の進み方も夢があればいい。地方支部をふやす。そして科学部、植物部、学術部、など少人数でもいいからいろいろの部を作つて分派をたくさん作り、その分派の交流を大切にする。

当人がわからなくてもやるということに意義がある。

今の世界で一番こわいところを知っていますか。それは水のないところですよ。アラビアでは海水から電力にしたり、一〇〇メートルないし二〇〇メートルの井戸を掘ったりしているが、もっと水のないうところは太陽熱を利用すべきだ。一日一トンの水をどうすればつくれるか、それにはいろいろの夢があるではありませんか。空氣からつくる。太陽のエネルギーを利用する。そのエネルギーをどうやって動かすか。基本的にはむずかしいですよ。

植村直己さんが次回は南極へ行予定で今冬アメリカの基地へ顔つきなしてアメリカの援助を必要とするので仲立をする。つまり黒幕ですよ。

今行われている日米民間環境会議ではエネルギー問題がある。国

内事情がアメリカと違うが主旨は同じで、経済的な問題などがあり生活のスタンダードをさげる必要はない。アメリカ人で成田空港反対の人が会議のメンバーの中にいて、台湾経由で羽田から来日して熱心に討論している。

昆虫採集はいいがデパートでカブト虫などを売っているのは日本の特色である。など、いろいろの方面の話を散文的に話される。最後に名刺をみせていただく。

## 報告

## 第三七一回小集会報告

## 会津駒山菜山行

## ・山菜勉強会

5月22日、片岡博氏を講師とする山菜勉強会がルームで開かれました。参加者45名。5月下旬の松枝岐付近で採れる山菜についてスライドによる説明と、長岡の松本氏が採取しルームへお持ち下さった山菜についての説明。

## ・山菜山行

5月27、28日、会津駒に登り松枝岐に泊る山菜山行をおこないました。参加者68名。27日は会津駒登山、スキー登山、山菜採りの三グループに分れ行動、その夜は民宿白木屋で親睦会をおこないました。

## ・写真交換会

6月9日、会津駒山菜山行の写真交換会をルームで開催。出席者

ローマ字で、エテサン・E・ニシポリと印刷してある。エテサンとはエテ公つまり猿のこと。さつとあらわれ、さつと話されてさつと消えて行かれた。もっと話をうかがいたかったがお忙しい中お話をしていたただいただけでも楽しい一時をすごすことができた。次回は山研にでも泊つて時間の心配なくお話をききたいというのが集った人の希望でした。十七名出席。(斎藤かつら)

38名。写真交換会と同時に森氏の「野沢温泉スキー集会」、高橋氏の「会津駒山行」「十勝岳集会」の8ミリが上映され、なごやかな雰囲気集会でした。(集委員会)

## 北海道支部十周年記念山行

## ・テガリ岳報告

会報「山」二月号(三九二号)でテガリ岳山行を募集したところ、全国各地から希望者が殺到し、一部の方には心ならずもお断りの止むなきに至り、まことに心苦しく思っております。

さて、六月に入り受け入れ準備万端整ったところ、宮城県沖で鯨の大暴れによって、国鉄東北線不通や十六日当日は羽田発の日航五〇一便が千歳空港上空まで飛来しながら濃霧のため着陸できず羽田に引返す等、天災地変が相次ぎな



がらも、参加者は七十一名となった。静内駅から三台のマイクロバスに分乗し、午後一時半、ペテガリ山荘に到着、逍遙コースの二十人は一〇五〇メートルにキャンプ、夕食は時鮭と呼ばれる生鮭の入った石狩鍋で、明日の好天気を期待し乾杯をして就寝。

翌十七日、朝午前一時、山荘の健脚コースに起床の声がかかる。一時十五分にはもう出発である。

尾根にキャンプの組は、山荘組の足音に目を覚ます始末。一二五九メートルに登ると、一八三九メートル峰、ヤオロマップ岳、ペテガリ本峰、中ノ岳、神威岳等、微風薄曇りではあるが視界は日高山脈の全域を見渡せる位、これ程恵まれた天候に主催支部として成功と思いつつも重い足を頂上へと急ぐ。

最後の直登五〇〇メートルを終え、頂上では相川、佐々木先輩の年寄りが担ぎ上げたビールを若い連中に飲ませ、その顔を眺めたいと大張り切りに、我等も腹をすえ大いに飲み面の皮をさらに厚くした。(登頂者六十名)

頂上では、北海道支部恒例の野点が、緋毛氈を敷いて始まった。一七三六メートルの薄茶は、参加した人でなければわかるまい。夜のユートピア牧場での夕食を待ち切れず牛乳を飲んだり、じゃがいもを茹でてもらったり。七時大塚支部長、望月副会長の挨拶に

始まり平沢大先輩の乾盃で大賑いで骨付き肉に武者振り付く……。

皆さんペテガリ岳山行の疲れ等どこかに飛んでしまい、夜更けまで日高炉辺山話が続く。

十八日朝、朝食の牛乳が胃の目覚しである。九時半バスが迎えにくる。皆、名残りを惜しみながら各地へと散って行く。(平野明)

〔参加者氏名〕 高遠安、森川洋佑、長沢光和、平岡誠一郎、久保孝一郎、牧野衛、望月達夫、松家晋、山形不二男、市吉明子、市吉惟浩、田口謙之介、大森久雄、岸栄、坂井八郎、福田光子、神原忠夫、斎藤桂、権藤太郎、権藤広子、横山厚夫、横山康子、佐藤テル、北島光子、佐藤節子、斎藤慶子、高沢英夫、砂田定夫、守田治夫、野口末延、吉村健児、高橋憲二、中垣淑子、富田美知子、石間信夫、川崎精雄、井関扶、井関ヒロ子、石橋正美、鼎治紀、佐野加代子、菅川高男、佐藤正雄、佐々保雄、相川修、大塚武、山川力、新妻徹、高沢光雄、浅利欣吉、兼平治水、萩谷三枝子、柳田涼子、近藤信行、大山幸太郎、根岸祥一、岩崎三郎、片山全平、阿部勇作、森村浅香、平野明、登坂信雄、建石八重、中河与一、平沢亀一郎、大音師忠一、宿輪治一、金田一勉、淡川舜平、小林年、末岡睦。(順不同)

### 第三五回 三水会便り

◇六月二十一日、三水会例会は、「山岳人を語る」のテーマで登山史の大家山崎安治さんに大いに語っていただけると期待していたところ、直前になって病気のため実現不能。そこで、ヒラリーさんのように現地に住みついて医療や教育など民生向上のために、輝しい登山の営みの後の人生を捧げている外国人にばかり任せておけないと、ネパール・ヒマラヤの奥地の子供達と文房具を介して心を結び、実践活動が続けておられる清野恒さんに代講を頼み込んだ。題して「ヒラリーを語る」出席二十七名。

ヒマラヤの奥地に生活の根を下している人達と、そこに山があるから遠い他国から登りにゆく人達との交りのあり方が、芸術家清野さんの情熱溢れる語りくちを通して、あるいはストレートに、あるいは屈折しながら、参会者の心の中に強く滲透して来るのを覚えた。さらにルームに掲げてある清野画伯の二つの絵(先日の開室記念絵はがきの原画)の筆をとられたときのお気持も披露していただいた。有志差し入れの原酒・麦酒も参会者を一層快よくして、拍手の裡に散会。そのあとで水溶性色鉛筆による山のスケッチのやり方の実演のおまけまでついた。

### 会務報告

#### 6月理事会

6月12日午後6時30分

本会ルーム

出席者 西堀会長、望月、折井、各副会長、高遠、中川、橋本、鈴木、黒石、田村各理事、片岡、監事、浜野、山崎、金坂、松丸、近藤各評議員

委任 宮下、大森(久)、大森(兼)、倉知、牧野内、嵯峨野各理事、中島委員

△議案

・ドイツ山岳連盟(交流登山)若手メンバー来日の件(橋本)

△報告事項

・海外連絡  
・オーストリア山岳クラブ百周年記念(一九七八年十二月)に参

8月13日来日、778名、行動予定作成、経費試算、出来るだけ委員会が調達するが、経費不足分のうち本会からは30万円を限度として臨時支出する 承認

・会員町田立徳氏死去、遺言で蔵書寄贈の申し出あり(望月) 受入れた承認

・年次晩餐会会場決定(高遠)京王プラザホテルに決定、諸物価値上りと数年間会費を据置していたので今回値上げする 承認

### 売場ご案内

#### 最新入荷の本・報告書

- 中八ヶ岳一写真集(山岳写真同人四季)4,000円
- 中白い尾瀬一写真集(金海次郎)2,500円
- 中一高旅行部の足あと(縦の会)2,500円
- 中雪稜のかなたに一八海山遭難事故報告書(桐生勤労者山岳会)1,300円
- 中東京周辺春夏秋冬花の散歩みち(実業之日本社)630円
- 中高山と亜高山の花(教養カラー文庫)580円
- 中こぶし咲く一女性特集号(もんたにゅ26号)400円
- 中夏の博物詩(もんたにゅ27号)400円
- 中私だけの安曇野(丸山健二)860円
- 中コンサイス日本山名辞典(三省堂)2,200円
- 中静かなる山(川崎精雄、望月達夫、他)1,700円

### 茗溪堂

〈山の本の売場〉 お茶の水店三階  
営業時間平日・午前10時30分より午後8時  
日曜祝日・午後0時30分より午後6時30分

加要請あり

オーストリア山岳会の青年集会

(UIAA行事) に対する招待

イタリア・トリノ映画祭、スイ

ス山岳映画への出品申込要請

・集会 (中川)

6月20日 会津の山を語る会

・図書 (山崎)

10月21日 山岳図書交換会

12月2日 この一本展

2月 山岳図書を語る夕べ

3月 山岳史懇談会

・支部 (望月)

6月16日、18日 北海道支部10

周年記念山行(ベテガリ岳)

## ルーム日誌

(53年5月)

8日(月) 集会委員会

9日(火) 青年懇談会

10日(水) 婦人懇談会研究会、図

書委員会

11日(木) 学生部リーダー会

12日(金) 支部長会議、昭和53年

度通常総会(於私学会

館)

17日(水) 三水会

18日(木) 指導委員会、図書委員

会

19日(金) 学生部リーダー会

22日(月) 山菜勉強会

23日(火) 理事会

24日(水) 婦人懇談会

25日(木) 婦人懇談会研究会

26日(金) 学生部リーダー会

30日(火) 自然保護委員会

## 会員移動(5月)

## 支部変更

七二五八 毛利 昭雄(その他↓

越後)

三四五三 大倉 寛(その他↓

越後)

五四一一 荒谷 一郎(その他↓

静岡)

五五八九 吉田 茂(その他↓

東海)

六四〇〇 林 哲也(その他↓

東海)

六九七〇 川北 仁(その他↓

東海)

八二七二 山部 一実(岩手↓そ

の他)

七八一四 高倉 信孝(その他↓

東海)

退会者

五二八六 石鍋 孝夫

物故者

二〇一三 永谷 義三(52・11・

20) 届53・5

三九四〇 杉山 孝(53・5・

31)

昭和五十三年八月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五十四

サンビュウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会

編集代表 西堀 栄三郎

電話東京(20) 四四三三

振替口座東京三十四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

株式会社 技報堂





登山・スキー用具専門店

# 山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101  
TEL. 06(362)5736

●買いやすい  
山の店

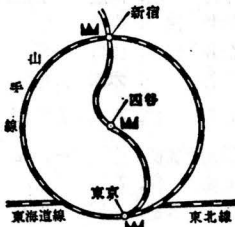
●北へ来たら  
山の店

●フレッシュな  
山の店

山とスキーの専門店

# 片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9  
片桐盛之助  
電話 東京(831) 1794・6680番



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地  
TEL (351) 7432・1912  
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五  
TEL (271) 1560・8575  
新宿店 新宿ステーションビル四階  
サービスショップ  
TEL (352) 6564  
日本信販加盟店



山友社 たかはこ

信用と知識を売る  
山の専門店

登山用具は  
ぜひ  
**秀山荘**  
中央区八重洲 2の1の11  
☎ 281-8456

登山とスキー具

# イワタ

東京都中央区日本橋通2-1  
PHON: 271-7686・1718

登山・スキー用具の専門店  
エーデルワイスマークの

# 好日山荘

東京店・中央区銀座3-5-7 ☎(03) (561) 36000  
スキーショップ ☎(03) (561) 0966  
吉祥寺近鉄店・吉祥寺近鉄7階 ☎(0422) (21) 3331(代)  
大阪店・北区曽根崎1-2-8 ☎(06) (364) 0933(代)  
堀田店・北区曽根崎2-7-2 ☎(06) (315) 7985(代)  
大阪三越店・北浜三越新館2階 ☎(06) (203) 1331  
セシルシー店・千里中央セルシー1階 ☎(06) (833) 0123  
福岡店・博多区須崎町1-4 ☎(092) (281) 3440



山の本

既刊

## 山を見る日

A五判三四八頁 定価二、九〇〇円  
深い山登りの世界を綴った『雪山・藪山』の続編

望月達夫

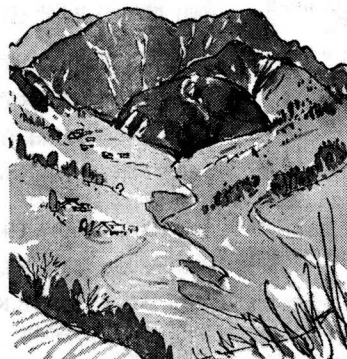
## 遠い山近い山

(第二版) B六判三〇四頁 定価一、五〇〇円  
ひっそりとした山や峠の遍歴の楽しさを語る

藤島敏男

## 山に忘れたパイプ

(第二版) 菊判五八〇頁 定価三、二〇〇円  
著者の山登りの年輪の大きさが窺える名著。



●主な山名  
前黒法師岳/山伏  
矢倉岳/富士見山  
達沢山/御神楽岳  
御池山/太郎助山  
未丈ヶ岳/藤尾山  
鍋割山/十二ヶ岳  
家老岳/オドヶ山  
大博多山/蓬田岳  
窓明山/羽賀場山  
神座山/大鳥居山  
台倉高山/大西山  
吾国山/大木戸山  
水ヶ森/日本平山  
土埋山/猪ヶ森山  
道志二十六夜山  
甲州高尾山/ほか

新刊

## 静かなる山

川崎精雄/望月達夫/山田哲郎  
中西章/横山厚夫 (共著)

B変型二一〇頁 写真一六葉 定価一、七〇〇円  
あまり知られていない山々九七座の四季折々の紀行。図上で未知の山に思いを馳せるときに似て、沢歩きや、藪こぎ、雪上に道をさがす、あるいは見なれぬ角度から山を眺めるなど、忘れられがちな山登りの楽しさが味わえる。

茗溪堂

〒101 東京都千代田区神田駿河台2-1 電話03-291-9442 振替東京8-24723 ●お買上げ、ご注文は最寄り書店をご利用下さい。